

平成28年度 授業改善推進プラン

学校名 豊島区立西巢鴨小学校

校長名 内 藤 信 之 （公印省略）

1 授業改善の取組に対する自己評価

＜評価基準＞A満足できる Bおおむね満足できる C改善を要する

No.	項目	内 容	評価	評価の説明
1	実績・取組	27年度の「授業改善推進プラン」に基づく取組の成果	A ・ B ・ C	全教員で授業改善推進プランをもとに指導上の課題を共通理解して、児童の指導に取り組んだ。また、年度の半ばに授業改善推進プランの振り返りを行い、年度末に向けてもう一度全教員で共通理解を行った。都のベーシックドリルや学校独自の漢字検定などを活用し、基礎・基本の定着に力を入れ、さらに読書活動の充実も行ってきた。しかし、関心・意欲や、家庭環境が学習に反映していることは否めない。今後、ベーシックドリルやアシストシート等を活用して個に応じた指導を行い、基礎・基本の学習の定着を図る。
2	28年度学力調査の結果分析	28年度学力調査の結果分析から見えた成果や課題等について	A ・ B ・ C	6年生は、4教科とも達成率も得点率も区の平均より上回っている。特に国語では、昨年度より区との差が大きくなっている。5年生は、昨年度、達成率が区より下回っていたが、その差が小さくなり、区の平均に近付いた。4年生は、国語と算数で区の達成率より下回った。3年生は、国語と算数でほぼ区の平均と同じくらいである。課題としては、各教科の知識・理解が十分に定着できていないことが挙げられる。また、昨年度の課題であった国語の文章の読み取りや算数の数学的な考え方などは、まだ個人差が大きい。また、学年差も課題である。学習規律を整え、学級経営を充実させ、個別指導をさらに進め、保護者との連携、協力を図っていく。
3	教員間での課題の共有	教員間で児童・生徒の実態を把握し、課題を共有しているか。	A ・ B ・ C	学年で調査結果を分析をし、次に教科ごとに分析をして、課題と改善の方策を検討した。その際、全教員をいずれかの分科会に配置し、関われるようにした。さまざまな意見が出る中で、改善の方策を出し合い、改善の方向性を定めている。
4	説明責任	学校の学力向上の取組や内容が保護者に理解されているか。	A ・ B ・ C	本校の学力向上の取り組みや指導の内容をホームページや保護者会、プリント等で保護者に伝えている。7～8月の個人面談では、児童一人一人の課題や学力向上の方策を個別に伝えた。総合的な結果については、学校だよりで紹介するとともに、8月末に、ホームページに掲載をする予定である。

2 自校の教科指導における課題と改善の方策

教 科	課 題 (分析・考察によって明らかになったこと)	改善の方策
国 語	・言語についての基本的な知識や理解が不十分(漢字やローマ字の定着、語彙等)。 ・文章の要点を捉えたり、それについての自分の考えをまとめて書いたりすること。 ・時間内に全部の問題に取り組めない。	・漢字やローマ字の学習では、繰り返しの練習とタブレットPC等を使って生活の中での活用を行う。また、辞書を身近に置き、漢字の意味を調べたり、語彙を広げたりする。 ・様々な分野の本に触れ、読書活動を充実させる。そのことで、文章を読むことに慣れたり、必要な情報を読み取ったりしていく。 ・自分の考えが書けない手立てとして、ポイントを絞って考えるように支援する。また、メモを書かせて、その後必要な情報や順序を考えさせ、文章にまとめるようにする。 ・普段のワークテスト等に取り組むときに、時間を意識させる。
社 会	・基本的な用語の意味の理解が不十分。 ・資料を読み取る力が不十分。	・初めて出てきた社会的な用語は、視覚的な教材や具体的な事例を取り入れて説明し、定着させる。その後、指導者も意識して繰り返し使うようにする。 ・地図や八方位を教室に貼るようにする。 ・問題解決学習を意識して行う。 ①目的に応じ、資料から必要な情報を取り出す ②取り出した情報を比較、関連付ける ③目的と手立て、原因と結果などを理解したり推論したりする ④結論を導く
算 数	・計算のミスが多い。 ・図形の見方が、固定している。 ・量感が備わっていない。 ・百分率が定着していない。	・計算をした後、確かめる習慣を付けるために、確かめ方を指導し、計算を工夫して行えるようにする。 ・図形を提示する際に、上下や方向を変えて提示する。 ・「量と測定」の単元を学習した後、いろいろなもの同士を比べさせたり、もとにするもののいくつ分かを考えさせたりする。 ・「基準量×割合＝比較量」を定着させ、□を使って式に表せるようにする。 ・式⇔言葉⇔図など、1つの問題からいろいろな表現ができるようにする。
理 科	・基本的な知識理解の定着が不十分。 ・発展的な問題や活用力が弱い。	・観察や実験の質や量を充実させ、実感を伴った理解を図る。 ・問題解決学習では、結果から考察の段階を重点的に行う。結果を分析する際には、自分の結果だけではなく、学級全体の結果を見て共通性や傾向を読み取るようにする。 ・日常生活と関連付けて考えさせるようにし、科学の意義や有用性を実感させる。 ・理科としての用語の意味に注意させ、基本的な知識を定着させる。

3 自校の課題と改善の方策

教育課題	課題 (分析・考察によって明らかになったこと)	改善の方策
授業でのICT活用	タブレットPCや電子黒板を活用した授業が定着している。調べ学習や、写真、動画を活用しての振り返り、作品の対比などで児童の考えを深めたり共有したりする活動に役立っている。さらに活用を図る。	情報教育の年間指導計画に沿って、発達段階を踏まえ計画的に指導するように共通理解を図る。また、学校公開等でも積極的にタブレットPC等の活用を促し、保護者にもICTを活用した授業を公開する。また、支援員とも連携し、教員の研修を年に数回行い、情報を共有する。
言語活動の充実	選択式の問題より記述式の問題の方が正答率が低い。自分の意見や感想を文章で書いたり、話したりすることに慣れていなかったり、苦手意識をもっていたりする児童が多いと考える。	言語活動を充実させるためには、まず目的意識や相手意識をもたせ、めあてを意識させることが大切である。そして、自分の意見や感想を書いた後、児童同士での交流活動を充実させ、発表や話し合い、学び合いの学習を行う。また、技能面で、話し方や書き方をスモールステップで指導していく。
豊島ふるさと学習の充実	区庁舎や豊島の森の教育面での活用を3年生では行っているが、他学年での活用はまだ十分ではない。地域との対比や、環境教育での活用など教育的活用をより図っていく必要がある。	総合的な学習の時間では「豊島ふるさと学習プログラム」を活用し、地域の人材や諸機関と積極的に関わりをもつようにする。幼稚園や高齢者施設との交流は定着している。担当が代わっても同じように活動ができるように手順のマニュアル化を進めている。地域の催し物にも積極的に参加できるように声をかけていく。
学校図書館の充実	高学年の調べ学習や読書活用時間が十分ではない。学校図書館司書をさらに、効果的に活用を図っていく必要がある。年2回の読書旬間をさらに充実できるようにする。	週一回の読書タイムを計画的に行い、保護者や担任の読み聞かせを行う。また、学校参観期間中に巣鴨図書館の方によるブックトークも全学級実施する。さらに、年2回2週間ずつ読書旬間を設け、めあてを決めて読書をしたり、児童一人一人の「おすすめの本」を掲示したり、図書館探偵を行ったりする。図書館司書や保護者のボランティアの方を活用し、より図書館を利用しやすくする。
道徳教育の充実	「特別の教科 道徳」を実施しながら、教職員がさらに共通理解を図る。また、東京都や文科省の資料、副読本等がより効果的に活用できるようにしていく。	「特別の教科 道徳」の実施に向けて、指導内容や資料、授業の展開の仕方、評価などの研修を行う。また、道徳教育推進教師を中心として、児童自らの生活を見直して児童の規範意識の向上を目指す。さらに、国や都の資料、副読本、身近な出来事の教材化など、資料の充実を図る。
体力向上	家庭と連携を図り、生活リズムの確立を図る必要がある。体力テストでは、投げる力、持久走、俊敏性などがやや低い。放課後、家庭における健康、体力づくりの環境が、個人差の要因の一つである。	毎学期初めに「元気アップカード」に取り組みせ、自分の生活リズムを振り返らせる。体育以外にも体育朝会や休み時間等で、体づくりの運動や持久走、なわとびに親しませ、継続的に運動に取り組み、楽しさを味わわせる。また、休み時間はできるだけ外で体を動かせるように支援をしていく。
教員の授業力向上	昨年度まで校内研究で理科、生活科、生活単元において問題解決学習の授業を推進し、児童が主体的に取り組める支援を行ってきた。その結果、理科では、問題解決学習の形式がだいぶ定着した。理科以外でも問題解決学習の授業を行っていく必要があると考える。	今年度は、児童が主体的な学習が行えるように、アクティブラーニングについて、全教員で研修を行う。教科については、理科や生活科だけでなく、様々な教科で取り組んでいく。その際、授業研究を中心に取り組む。

自由記述（幼小中一貫教育連携プログラム、学力調査とハイパーQUの活用 など）

- ・幼小連携は、発達段階や季節に合わせ、年間を通した計画を立てて実践をしている。交流活動を通して、相手を大切に「話す・聞く力」の伸長を図っている。小中連携に関しては、具体的な実践が形式的になってきているめんがあるので、小中連携連絡協議会の内容を、よりテーマに即して考えていく必要があると考える。
- ・ハイパーQUについては、児童理解に役立っている。どの学級にも要支援群の児童が存在するので、一人一人の課題や問題点を分析して、今後の学級経営や授業に役立て、変容を確かめていきたい。
- ・学力調査に関しては、昨年度より形式が変わり、今年度で2年目となる。経年の結果を分析し、活用できるように、しばらくの間同じ形式を続けていっていただきたい。
- ・家庭学習に「学年×10分」を目安に取り組ませる。
- ・「授業改善推進プラン」は、2学期末に振り返りを行い、再度課題を共有化していく。